

## 二組の親

結城 亮介

「今日は実家に泊まってきなさい。うちのことはいいから。」

「そう。いいの？ありがとうございます。そうするわ。」

義父の一周忌の法要を終えて、お寺の前で参列者に頭を下げている義母の姿を横目に見ながら妻に囁くと、妻は小さな声で答えた。

義母は10年前から週3回透析に通っている。自宅から病院へは一人で車を運転していくが、透析の終わる頃を見計らって妻が病院に行き、帰りの運転を引き受ける。その足で買い物をすませ、夕食と翌日の食事の支度をして帰るのが妻の役割になっている。

「あなたの運転より、私の方が安全よ。でも折角だから運転させてあげる。」最初の頃こそ義母も元気で帰りも殆ど自分で運転していたが、今では透析後の疲れがひどくて帰りの運転はままならなくなり、すっかり妻に任せていると言う。

そんな義母に比べ義父は80才になっても時折朝まで遊んでくる丈夫な人だった。

「絶対にお父ちゃんより私が先に死ぬわよね。あの人が一人になったら大変よね。威張るだけで、家の事は何も出来ない人だから。」

私の妻に時折このように語るのが義母の口癖になっていたようだ。

「『先の事は心配しなくていいから、お母さんは自分の事を考えていればいいのよ。』としか言いようがないのよね。」妻が時折私に話していた。

私が家内の実家に顔を出すのは年に数回だが、義父が元気な時に、決まって私との間にかわす会話があった。

「申しわけ有りません。嫁に出した娘に家内や家の世話をして貰って。貴男のご両親にも申し訳なくてね。女房は幸せです。」

「何を仰有るんですか、私には両親が二組いるんです。私の両親も妻の両親も同じです。私の親は離れているので年に数回顔を出す位しか出来ませんが、お義父さん達は近いのですから遠慮することはありません。気にしないで下さい。」

今、振り返ると義母は自分の娘である私の妻を通して、義父は息子である私を通してお互いへの思いやりを語っていたような気がする。

私と妻が、そのような義父や義母の心に少しでも応えていたとしたら嬉しいのだが。

義父と毎回かわす会話はいつも私に自分の母を思い出させた。

私の父はだいぶ前に亡くなり、母は弟と暮らしていたが病気の後遺症で体が不自由になり東北の地方都市にある老人介護施設に入っている。

2、3ヶ月に一度、発熱や体調不良を起こすが、病院が併設されているので直ぐに入院処置出来て好都合であるものの、東京に住んでいる私は、年に数回しか母を訪ねることが出来ない。

近くに住む弟が毎週通って身の回りの世話をしてくれている。弟は末っ子で両親とも昔から「一番可愛い」と言っていたこともあり、幸い母も満足しているようだ。

私は時折顔を見せるだけで弟に任せっきりになっているのが心苦しい時もあるが二人とも気にしていないようなので有り難く思っている。

一度、急に都合がついて、事前に連絡せず突然母を訪ねたことがある。母は驚きながらも喜んでいて。訪ねて良かったと思いながら母と話していると、母が嬉しそうに教えてくれた。

「来週の休みに姉ちゃんが曾孫達を連れて来るんだよ。娘夫婦が車で連れてきてくれるんだって。電車だと半日かかりだからね、乗り換えも多いし。車なら楽なものね。」姉は日帰りの難しい遠方に住んでいる。

「良かったね。」と言いながら私は突然訪ねたことを後悔していた。私は、事前に連絡をしなかったことでカレンダーを見ながら指折り数えて待つ楽しみを母から奪っていたのに気が付いたのだ。

同じ事をするにも、ほんの少し心遣いをするだけで相手に与える喜びは大きく左右される。私は良かれと思いながら心足らずであった。それ以来、訪ねる際は必ず少なくとも1週間以上前には連絡するようにしている。

ここでもう一つの失敗を思い出した。なれない施設暮らしで不自由しているものはないかと気になり、着る物や食べたい物があれば送るからと何度か尋ねた事がある。

「食べる物も着る物もいらない。お前の顔を見られるだけでいい。」

「判った。でも弟は男の一人暮らしで大変だし、東京の方が手に入りやすい物も多いと思うから遠慮しなくていいからね。」

私は何気なく言ったつもりであるが、母は気になったようで後日弟から電子メールが届いた。

『先日はありがとうございます御座いました。……物は要らないから、たまに顔を出してくれた方が良く、話していました。……』

後から弟に聞いたところによると、母親として私を心配しているものの、自分では自由に動けないので私が顔を出すことで安心しているようだ。私は50半ばの年齢であるが母親にとってはまだまだ心配なのかも知れない。

『親はいつまでも子供の事を心配したいんだ。そして顔を見て安心するのが嬉しいのさ。兄さんも自分の子にはそうだろう。』弟の言うとおりだ。

私が施設から帰ろうとすると母が言う。

「顔を見られて嬉しいよ。また、来るんだよ。みんなによろしくね。」

「また来るよ。その内、家族も連れてくるからね。」  
妻や子供達も時折顔を出させるようにしているが、そんな時は母が『息子の家族は上手く行っているようだ。』と喜んでいるのが感じられる。

法要が終わった翌日妻が家に戻ってきた。  
「どうもありがとう。やっぱり泊まって良かったわ。他の人達がいる時は元気だったんだけど家に帰ったらすっかりくたびれて動こうとしないの。ゆっくり休ませたら今日は少し元気になったわ。朝ご飯も一緒に食べたし。」  
「一周忌が済んでまた落ち込んだのでなければいいけどな。」  
「多分、もう平気だと思うけど……。明日は透析に付き添うので様子を見て泊まるかも知れないわ。」  
「うん。判った。あの時のようになつたら大変だからな。」

一年前、丈夫だった義父が突然ガンを宣告され、数ヶ月の闘病後に亡くなった。  
「絶対、私が先に逝くと思っていたのに……。でも、私より先に逝って良かったのかも知れないね。私が先に逝ったら威張れる相手がいなくなるものね。死ぬまで威張らせてあげたものね。」  
位牌の前で同じ言葉を繰り返す義母の言葉は私達にも切ないものだった。

義父の死後、妻は毎日のように実家に行って弔問客の相手をしたり、義父の遺品の整理をしていたが、一ヶ月ほどでそれも終わり、漸く通常の日々に戻って10日ほど経った頃である。

妻が私に言った。  
「私、今週から土曜日の晩は母の所に泊まりたいと思うの。いいかしら？」  
「構わないけど。どうしたの？」  
「お母さんを一人にすると気持ちが落ち込んで寝てばかりいるようなの。家の片づけどころか食事も殆どしていないようなの。私が透析に付き添う日は私がいるから無理して平気な顔をしているみたい。自分では大丈夫と言うけど心配でならないの。」  
「そうか。やはり夫婦だね。お義父さんを喪ったショックから抜けられないんだな。娘の貴女と一緒になら少しは落ち着くかも知れないね。一晩と言わずしばらく泊まったら？」  
「ダメよ。私も用事があるし、それに泊まってばかりいると母が貴男に気を遣ってしまうの。週に一度なら母も気兼ねをしないと思うの。」  
「そうか。気にする必要は無いんだけど……。貴女が考えてお義母さんのいいようにしてやりなさい。お義母さんが心を許せる話相手は貴女しかいないからね。」

後日、妻から、義母が口では心配しなくていいのにと言いながら喜んでいると聞いて私も嬉しかった。

妻の実家は我が家から車で1時間と近いので、少々遅くなっても妻が実家に泊まることは滅多に無かった。私と結婚してからの二十数年間、妻が長男を出産した時を除けば実家に泊まったことは数回だったと思うが、それ以来、妻は週に一度実家に泊まるようになった。妻の都合が付かない時は息子や娘が病院に行ったり、泊まったりの代役をする事もある。妻の両親は二人とも私とは話が合うと思うが、こういう場面では私が表面に出るよりその方が良いらしい。

私の母も父が亡くなった後、何年間か一人暮らしをしていたことがある。「家には母ちゃんの部屋があるから東京においでよ。」といくら誘っても「父ちゃんと二人で建てた家を出るのは嫌だ。知り合いのいない東京には住みたくない。」と頑として受け付けて貰えなかった。

結局は「自分は一人暮らしなので母ちゃんが来てくれれば助かるよ。」と言う弟の言葉を受け入れて、渋々、弟と暮らし始めたが、いつの頃からか「楽しいよ。こっちに来て良かった。姉ちゃんも孫の顔を見に来たついでだと顔を出してくれるよ。それに東京と違って言葉が訛っていても買い物に困らないしね。」と笑いながら言うようになっていた。姉の娘の一人は弟の家から1時間のところに嫁いでいる。

母が父と暮らした家を出るには口に出せない様々な思いがあったのだろう。私は母の思いを無視して自分の都合に合わせて東京で一緒に暮らそうと言いながら『親孝行』ではなく『子孝行』を要求していたのかも知れない。

一人暮らしの母の寂しさや思いは判っていたつもりだが、理解していなかったようだ。義母に対しても同じだったのかも知れない。

未だに親孝行らしい親孝行はしていない私だが、実母と義母の区別無く大切な親であるのは変わりがない。出来ればもう少し積極的な親孝行をしたい気持ちはあるものの『子孝行』の押しつけだけは避けたい。

遠くの実母には今後も時折顔を出すことが、近くの義母には妻の背後から見守ることが私の出来る親孝行のようだ。

親孝行と言うにはあまりにもささやかすぎるが、先に逝った父にも義父にもこれで納得して貰うしかあるまいと思う。

合掌

平成14年6月 寄稿

筆者プロフィールおよび背景

ペンネーム 結城 亮介

昭和22年 新潟県生まれ、2才の時に父の転勤で東北の地方都市に転居

昭和45年 就職のため単身上京

- 途中省略 -

平成4年 義母、腎不全で透析患者となる

平成5年 父、3年間の闘病後死亡（享年76才）

平成8年 母、転倒による骨折入院後、4ヶ月間自宅療養に入る。兄弟姉妹で交代看護するも歩行が不自由となる。

平成9年 母、弟と同居

平成12年 母、急性髄膜炎で入院

平成13年 母、後遺症で下半身麻痺、自立歩行不能となり介護施設に入所

平成13年 義父死亡（享年86才）